

# 生きる 語る

交通事故で傷付いた遺体と葬儀会社の施術室で向き合う。防腐処置をし、傷口を縫い合わせて化粧を施す。生前に近い状態に見せる「エンバーミング」を始めて約3時間。大切な存在を失い、ぼう然としていた遺族が、遺体を見て寄り添い、語りかけていた。「穏やかな表情になったね。おうちに帰ろう」

エンバーミングとは、遺体を安らかな姿にし、遺族にゆっくりと最後のお別れをしてもらうための作業。日本でその第一人者、橋爪謙一郎さん(48)は初めて仕事をした時のことを、今もはっきり覚えている。

日本人技術者のいなかった、この世界に飛び込んで22年。「遺体の修復が、遺族の悲しみを和らげ、心の傷を治すきっかけになれば」との思いで、50000体以上の遺体と向き合ってきた。

## 「遺体の修復 悲しみ和らげるきっかけに」

# 傷直すおくりびと

手伝っていた。しかし、周囲から「後継ぎ」と見られているのが嫌で、都内の大学を卒業すると、大手イベント会社に就職。入社2年後には、大規模イベントのプロモーション戦略を立て

て前年の約10倍の顧客を集めたり、今では誰もが知る音楽アーティストの発掘に關わったりするなど、仕事に手応えを感じ始めた。人生の転機を迎えたのは、そんな頃だ。

「日本の葬儀を変えろ」と米国で勉強してこなかった。葬祭業の研修旅行で米国を訪れた父親(73)から電話がかかってきた。父はエンバーミングを目の当たりにして、欧米で普及する



エンバーミングについて説明する橋爪さん(若杉和希撮影)

エンバーミング 日本遺体衛生保全協会などによると、米国の南北戦争の際、遺体搬送のため、長期保存が必要になったことがきっかけで普及した。日本では現在、約50か所に施設があり、昨年は全国で約3万4000件の施術が行われた。日本人の技術者は現在約130人。

1967年	北海道千歳市で生まれる
86年	都内の大学へ進学
91年	都内のイベント会社へ就職
94年	会社を退社して渡米。エンバーミングを教える専門大学へ入学
2001年1月	カリフォルニア州でエンバーミングの資格を取得
4月	米国から日本へ帰国
2003年4月	エンバーミングの技術を持つ「エンバーマー」の育成機関の発足に参画

橋爪謙一郎さんの主な略歴

この技術が日本でも役立つと直感したようだった。ただ、今の仕事を辞めてまで、やる価値はあるのか。「家が葬祭業というだけで、からかわれたり、いじめられたりした嫌な思い出が頭の中を何度もよぎった」。決心するまで、約2週間かかった。

米国のエンバーミングを教える専門の大学へ入ったのは27歳の時。同大では初めての外国人だった。授業は、解剖学や微生物学など難解な分野のうえ、全て英語のやりとり。常に集中していないと、何も理解できなかつた。さらに、1教科でも試験で「赤点」を取ると、次の学期へ進めない厳しいルールもあった。

## 日本の先駆者「遺族を理解できる人材を」

「日本ではまず、遺族の気持ちを引きんと理解し、接することができると人材を増やそう。それができなかったら、エンバーミングを広めていくことなど、単なる夢物語に終わってしまう」。2001年に帰国後、エンバーミングの技術者を認定する社団法人「日本遺体衛生保全協会」と連携し、東

籍がなければ資格を取れないことがわかった。国籍がなくても資格が取れる地域を探し、実習を受けるため、手当たり次第に葬儀社へ履歴書を送った。200社以上の会社を当たったが、就労ビザの手続きなど面倒な日本人をわざわざ雇おうという会社はなかった。それでも諦めきれず、就職活動を続けて何とか、カリフォルニア州の葬儀社へ入社。経験を重ね、念願の資格を手に入れた。渡米から7年がたった。

「死と向き合うことで、生きることの喜びをより鮮明に感じられるようになった」。そう振り返り、「今を精いっぱい生き、家族や友人の喜ぶ姿をできる限り多く見ていきたい」と力を込める。

現在は一線を退き、後進の育成に努める一方、エンバーミングや遺族の心の支えになる「グリーンサポート」という活動を多くのの人に知ってもらうと、セミナーなどに奔走している。

読売 暮らしの 大手町モール <http://yom.sc/>

**衝撃吸収かかと サポーター**

かかとにパッド 2枚組2個セット (左右兼用) 4,752円(税込)

お問い合わせは ☎0120-76-3777 (受付時間:午前9時~午後5時)

インターネットで 大手町モール 7837 検索